

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)  
 昭和二十四年四月二十八日 運轉省 (特別及承認雜誌第三五二号)  
 昭和四十三年六月二十五日 印刷 昭和四十三年七月一日 發行

第三十四卷 第七号

# 浄土

七月号



法然上人鑽仰会

達



## — 汗 を 流 す —

太陽の季節である。若人は山や海に出かけ、太陽の男性的なつよい日差しを身にうけて、汗を流し、緑陰に涼気をもとめて、爽快さを味わうのである。

最近、文明の進歩により、暑い夏も、扇風機やクーラー等の冷房によつて、汗を流すことが少くなつた。

夏を快適に過すことに異存はないが、しかし、玉のような汗を流すことによつて、味わわれる爽快さを、現代人は忘れつつあるようである。

われわれは、勤勞によつて流す汗を通して、生産されたものの価値や尊さを味得するのである。汗を流すことを知らないものは、ほんとうの爽快さを味わうこともできず、ものの尊さ、ありがたさを感じることもできない。

汗を流すことをいとわず、一粒の汗を大切にしよう。お念仏は一粒の汗の尊さを気づかせてくれる。

—目 次—

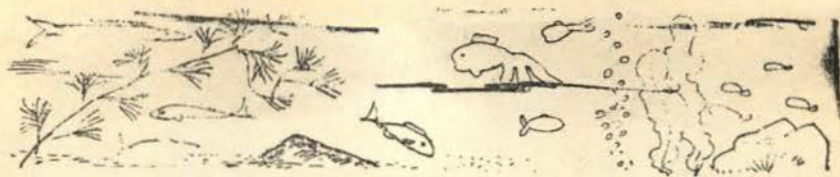
表紙「ほとけたち」松濤達文画

- お盆の行事……………福岡二三男…(2)
- 求 道……………原 裕彦…(6)
- インド・ネパールの旅③……………戸松啓真…(10)
- 人 情 父と夫のこと……………服部よし江…(21)
- お歌をいただく……………(5)
- 新刊紹介 年中行事法話集……………(17)
- 一大事因縁を感じる……………和森翠明…(24)
- 占いと念仏①……………川上法俊…(14)
- 維新のころの人たち①……………大橋俊雄…(18)
- 和訳三部経 法蔵菩薩の御修行  
……………村瀬秀雄…(28)
- 後 記……………(32)

紫の戸にあけくれかかる白雲を  
いつむらさきの色にみなさん

法  
然  
上  
人  
御  
歌



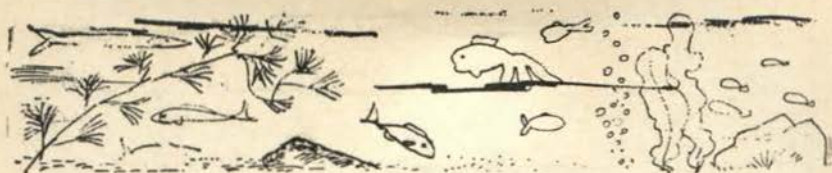


## 福 岡 二 三 男

— ○ —  
年中行事の中でも、お盆の行事は、仏教行事としては一番盛んに、津々浦々で行われているものの一つであろう。所によって、その行事の様子はいろいろで、郷土色豊かである。十三、四、五日の三日間がそれで、地獄の釜のふたもあくときである。精霊たちは、思い思いに吾が家に帰って、家族の人々の供養も受けるわけである。七月にやるところ、八月にやるところ、新暦、旧暦でやるところと、場所によってはまちまちで、八月初旬にやるところもある。夏蚕が上って、農家が一寸暇になった頃に行われた習慣がそのままのこっているらしい。

精霊たちにとっては、一年一度のご帰還とあって、待ち遠しいことであろうが、十三日の夕方に焚かれる「迎え火」は、暑さの過ぎた夕方のそよ風と共に、夏にはなくてはならぬ風物詩の一つである。或る地方では、わざわざ寺まで迎え火をもらいに行く。そして、それをほおずき提燈にうつしてわが家に持ち帰り、仏壇に火をとす。その火にいざなわれて、祖先達は里帰りをするわけである。

精霊棚は、これらの祖先を迎える棚である。仏壇とは別に新しく棚をつくり、そこに祖先を飾るのが普通である。この棚の飾り方も地方色豊かで、篠笹を門型に張りめぐらし、そこにそう麺を巻きつけるところもある。きうりやなすの馬牛を作って飾るのは、広く行われている風習で、祖先がこれに乗って帰って来るとでもいうことであろうか。とうもろこしで、うまく馬などが作られ、毛並みさえあざやかに出来ているのは、作った人々の情が籠っていて、ほほえましいものである。子供にでも作らしたか、かぼちゃ、かんびょうの中をくりぬいて、提燈型に造り、その中でろうそくがゆらいでいるのも、楽しい。しかし、もうこうしたものは、都会では殆んど見られなくなってきた。時代の推移とはいっても



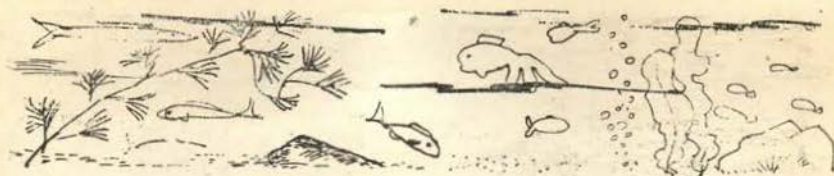
## お盆の行事

の、人の情が祖先に対して尽される薄さを感じしめて、淋しい限りである。

棚経とは、こうした精霊棚に祀られた祖先の霊に対して、僧侶が読経に来ることで、この行事は今でも広く行われている。それでも、十三、四、四五日の三日間では、とても多い檀家を廻り切れないので、東京あたりでは、七月に入ると早々に廻り初めているところもある。忙しくなってきた世の間とは言え、盆の本義は忘れられて、唯行事のみが習慣的に行われているに過ぎない。しかし、流石に仏都の京都などでは、盆ともなると街中に坊さんが往来し、盆だなあと思わしめること一入である。

精霊はこの間いろいろの供養を受けるわけであるが、寺で行われるお施餓鬼は、盆の寺行事として広く行われている。五如来を飾り、生野菜等を供え、塔婆供養がなされるのであるが、餓鬼に施こすとされるこの行事の起りは、日連尊者の故事にならったことであるらしい。(本号、年中行事詩話集の紹介の頁参照。)祖先のすべてが餓鬼道に陥っているわけではないが、祖先祭として是非とも続けて行きたいものである。家族制度が崩れ、又祖先に対する思慕と感謝の情が薄くなってきたこの頃では、ともするとこうした行事もないがしろにされ勝ちであるが、祖先あつてのわれわれであることは、いつまでも忘れないでいたいものである。

よく若い人々に、「貴方は何宗ですか」と聞くと、「私の家には、未だ死んだ人がいません」と何気なく答える。結婚すれば一家をなす今日からすれば、死んだ人のない事は結構なことではあるが、祖先がない筈はない。こんな所にも、宗教心が無いこの頃の人口の頼り無さを感じしめられる。



お盆が終ると、精霊は、送り火と共に、又極楽に帰って行かれる。精霊送りがある。この頃、観光行事となっている燈籠ながしも、この精霊送りの一つなのである。或る地方では、十五日の夕方になると、舟に乗って川下に精霊送りをする。さんだわらの上に、ローソクや線香を立て、いもの葉にいろいろな供え物をのせて、川面に流すのである。川風に吹かれながら、さんだわらの舟は、ゆらゆらと川下に流れて行く。夕方の涼風が一陣、川面を流れる。蛙の声も賑やかである。こんな田園風景は、とても雑踏する都会では想像も出来ぬことではあるが、せめてこうした風物に思いをはせつつ、祖先に思いを経してみたものである。

— — — — —  
京都で八月十六日行われる大文字やきは、京の夏を飾る重要な行事であるが、これも又精霊を送る送り火であることは、誰も知っていることであろう。今ではすっかり観光行事の様になって、多くの人々が押しかけて行くが、盆の行事の一つであることを忘れてはならない。遊び行事ではないのである。

終戦後間も無いころ、外人観光客の為、特別にこの大文字焼きをやったことがあったらしい。ところが、その年に限って、京都では天災地変等がしばしば起り、京都の人々を驚ろかした。そして、大文字焼きを時ならぬときにやったたりだと噂が広がった。京の人々は今更の様に、仏教行事のあだおろそかにすべきでないことを悟ったという。

— — — — —  
そんな馬鹿なことがと言うまえに、われわれは盆の行事の何であるかをもう一度反省して、祖先祭をねんごろに行ないたいものである。そこに人としてこの世に生れいでた本当のあがたさが見出されるものと思います。

## お歌をいたたく

### 勝尾寺にて

柴の戸にあけくれかゝる白雪を

いつむらさきの色にみなさん

(勅修御伝第三十)

柴の戸は勝尾寺の前にある山の名ですが、法然上人の陀住居を思わせる意味をもっています。あけくれは、明けと暮れのことです。毎日という意味ですが、戸の開けたり閉めたりとかけられています。むらさきの雲は、仏さまが来迎されるのに紫雲にのって来られるので、仏の来迎される時のことを意味しています。ここでお歌の意味は

家の前にある柴の戸に朝な夕な白雲がかかっているが、一体いつあの白雲が紫雲とみえて、仏さまの来迎をいただき往生の素懷をとげることができるのであろうか。

ということになります。

法然上人は御齢七十五歳の時に遠流にあわれましたが、同年十二月八日には赦免の宣旨

が下りました。しかしそのまま京都に入るところを許されずに勝尾寺におられました。勝尾寺は摂津国三島郡にある真言宗の寺で、ここに四年という長い間にわたって陀居されていました。勝尾寺におられた上人は、僧たちの法服がいたんでいたで、装束十五具を新調して与え、また一切経を施入したということが勅修御伝に記されていますが、ただそれだけで詳しいことが記されていません。

上人は七十九歳の十一月十七日に帰洛の許可が出て、同二十日に大谷の禪房に入られました。ところが御伝には「すべてこの三、四年よりこのかたは、耳目朦朧にして、色を見、声をきき給事、ともに分明ならず」とあり、翌年正月二日から病床につかれました。そこで恐らくは勝尾寺における上人の毎日、遠流の疲れが一時に出て、健康に恵まれない日日であったことと思われます。

しかし御伝には次のように記されています。「農夫が糸をひく、念仏をもてて田うたとし織女が糸をひく、念仏をもててぬきとす。鈴をならす駅路には、念仏をとなへて鳥をとり、ふなばたをたたく海上には、念仏を唱へ

て魚をとる。雪月花を見る人は、西楼に目をかけ、琴詩酒をもてあそぶともがらは、西の枝の梨子をおる。

これ皆弥陀をあがめざるをば暇瑾とし、殊数をくらざるをば恥辱とす。ここをもて花族英才なりといへども、念仏せざるをばおとしめ、乞人非人なりといへども、念仏するをばもてなす」

このようにすべての人々、田畑にも駅路にも念仏一色であったことを記しています。そしてこのようなことを「これ上人の教誡なり」としています。勝尾寺の僧衆には感謝され、四囲の人々が念仏にいきっていたというものの、御高齡と過労のために、ままならぬ日夜を送っておられた上人の心の中は、たしかに陀しいものがあつたと思います。

京都を目の前にして四年の間、勝尾寺で陀しい御日常をすごされました。そして心静かに仏さまが来迎され、本懷をとげられる日を心待ちに待っておられるというお歌を詠まれました。このお歌は素志をとげる日の歌というものの一抹の陀しさを感ずります。



## 求 道

—弥陀如来の

導きによりて—

「確かに空想なぞしてはいなかった。青葉が太陽に光るのやら、石垣の苔のつき工合やらを一心に見ていたのだし……僕は、ただある充ち足りた時間があつた事を思い出しているだけだ。自分が生きている証拠だけが充満し、その一つ一つがはっきりわかつている様な時間が」

これは、小林秀雄の『無常といふ事』の一文であります。が、どうも僕には、時たま襲い来る不安や妄念から逃げるべく、自ずと茫然自失の中に身を沈めやってしまう風があります。確かにそこで得るものは、「取るに足らぬ幻覚」に過ぎぬものでしょう。またそれは悪魔的な自己逃避の現われかもしれません。

しかし、そのことの中に、生死無常の此世と後世とをつなぐ絆が、時として見えるかに思えるのは、ただ陶酔的な邪心としてのみ片付けてしまつて果してよいのでしょうか。

信仰ということは自己の真実の心を以て帰依せんとするものを信じ尊ぶことであり、そこから生まれる確固たる信念こそ、実に、僕等をして有無を言わせぬものでありましょう。そして、これこそ信仰における魂や宗教を信ずるものは、煩惱に満ちた日常世間にあつても絶えずこの信念の心を持っています。ですから、この人達が何か動じ難い基盤の上にあつて、人生に真剣に対処しているのであると思ふのも、あながち誤まった考えではないと思ひます。

原 裕 彦

僕が初めて『南無

阿弥陀仏』と六字の名号を称えさせていだいたのは、まだ僅かに二年前のことに過ぎません。だからと言ってはおかしいのですが、僕の心に既にその様な確固たるものが存しているとは、毛頭言えません。しかし、念仏する己れの内には、ある時は何か充ち足りた時の流れを感じ、ある時は日常の行為の悔恨に心を痛め、ある時は将来への幸いを夢見るのです。これとても、「途方もない迷路」に入った僕の悲しい姿なのではないでしょうか。信仰の言葉を着た夢遊病者の姿なのではないでしょうか。蓋し、称名念仏において、過去、現在、未来の三界を回想し、苦悩し、希望することは、やはり僕の心をして無類の



勇氣と情感を呼び起します。

『無常といふ事』は、次の様な文章で結ばれます。

「上手に思い出す事は非常に難かしい。だが、それが、過去から未来に向かって餞の様に延びた時間という蒼ざめた思想（僕にはそれは現代に於ける最大の妄想と思われるが）から逃れる唯一の本当に有効なやり方の様に思える。成功の期はあるのだ……」

能『隅田川』は、僕には一つの大きいなる感動でありました。能というものが、既にして、莊重にして嚴肅なる影に、夢幻的情趣を濃厚に漂わせているが故に、特に感じを強くしたのかもしれませんが、この『隅田川』において生死の絆、過去、現在、未来の時間ということを、全く南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と称える念仏の声の内に深く印象付けられたのです。人商人にさらわれた我が子梅若丸を捜して、遠く武蔵の国隅田川の渡しまで旅して来た狂女が、渡守に向う岸の多勢の人の大念仏のことを尋ねたことから、その念仏が、既に一年前に亡くなった我が子梅若丸の菩提を弔うものであることを知るのでした。そうして、し

ばしひれ伏して泣き沈んだ後、  
「わが子の為と聞けばげに、この身も幾鐘を取り上げて」

と、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と念仏すれば、

「なうなう今の念仏のうちに、まさしくわが子の声の聞え候。この塚の内にてありげに候よ」

と狂女は、正に興奮歡喜して声を発するのです。更に、

「声のうちより、幻に見えければ」

「あれはわが子か」

「母にてましますかと」

「互に手に手を取りかはせば」

となります。しかし最後には、

「ほのぼのと明け行けば、跡絶えて、わが子と見えしは塚の上の、草茫々としてただ、しるしばかりの浅茅が原となるこそあはれなりけれ、なるこそあはれなりけれ」と結ばれる如く、我が子の面影も虚しいものとなつてしまふのですが、しかし、たとえ一時のことではあつても、既に死の世界にあるはずの我が子の姿が現実に見えたということは、やはり一笑には付し難い幾許かの真実を思わせ、深い感慨を催させるのです。南無阿弥陀仏と称える狂女の心には信念があります。いや、むしろこの南無阿弥陀仏の言葉の内にこそ、信念がしみついていられるのかもしれない。この母子は、遂に、生死の世界を超えた所に瞬時な

りとも住したわけなので

す。能舞台に現われる子万

の白い装束は、實際、夢か

現か、測り知れぬものを感じさせます。そしてこれら

のことが単に苦とか美とかという言葉で表わされるだけのものとしたならば、幾分の物足りなさを覚えさせます。

僕にとっては、信仰ということは大切な問題であります。そして近時、誠に幸運なことに、因縁に導かれ、仏門

(浄土宗)に入らんとする機会に恵まれました。だが、その心はと言えば、ややもすればぐらぐらと揺ぐばかりなのです。

この意味において、室生犀星の『餓人伝』という一篇の小説は——犀星においては、『あにいもうと』・『チンドン世界』などの諸作品と同じく、「市井鬼もの」と呼ばれるものであつて、血みどろの執念に燃えた迫力のある作風に属するもののなのですが——確かにある程度の決意と方向を僕に与えてくれました。

「学僧の毛利は去った。その間ちゅう、かれらはただこの大吹雪の中を寮から出て来た学僧が、雪の中を音もな



く戻ってゆくのを静肅にたまって、それだけを感じていた。

『蕨だ、かけるぞ、四枚あるんだ。』

『新蕨だ、ばかばかしている。』

四枚の蕨は和田平の手によって此の不幸な人間共の上に、ふうわりと羽根布団のように被せられた。かれらは少時、吹雪に叩き付けられることを忘れて、あたらしい蕨で羽繕いをする鳶のように或者は肩に当てがい、或者は背中に折り込んであたたまった。然も誰も毛利さんのことを有難いとも何とも喋らなかった。喋る言葉はどうに毛利が雪の中を蕨をかついで来たときに、もうちゃんと言ってしまっているようなもので、毛利もそれはすでに喜びを受けとった後のようなものであった。

『健人伝』は、この様な文章を以って、僕の心に鮮烈な衝撃を残して終っています、ここに登場する学僧の毛利



こそ、僕の指標として焼き付けられた理想像であり、前途への想いを遙かに馳せさせた主人公であります。この毛利なる澄みきった、

慈愛に満ちた主人公は、『餓人伝』において、最後のページにしか顔を出しません。でも、毛利こそ、犀星がこのページのために見つけ出した、最もふさわしい人物だったのです。室生犀星は沢山の抒情的な名高い作品を書き残しましたが、その中のほんの小さな一つ、作品『餓人伝』、この中であって僅かに描き出された学僧毛利、そして、この小さなものこそ、僕の心の最も大きな曙光としてふくらんでいるのです。

宗教の道というものは、透徹した暖かい信念の上に立つ限りに於いて、初めて開け行くのだと思います。今、出発の前に、何故か心ふるえる僕ではありません。

村 瀬 秀 雄 著

再 版

浄土宗 日常勤行式の解説

新書版 八六頁

定 価 一二〇円 送料 五〇円

〇 — 〇 — 〇 —

希望の方は本会に申込み下さい

△ 釈尊説法 座靈山▽

カトマンズの飛行場をとり立って、約四十分の後インドのガンジス河中流の要衝パトナへ着いたのは二月十三日の午後二時十分であった。四台のタクシーに分乗してパトナの町へ入ると、商業の町らしく人間と自動車と人力車で雑踏をきわめていた。パトナは釈尊当時バータリプトラ（華子城）とよばれ、王舎城（ラージャグリハ）の次にマガダ国の都として栄えたところであるが、釈尊当時は小さい村で釈尊が晩年クシナガラへ行く途中で立寄られ説法されたところである。パ



靈鷲山の頂上、釈尊説法の座

— インド・ネパール  
の 旅 (3) —

— 戸 松 啓 真 —

トナからラジギール（王舎城）への道路の両側には、次第に椰子の木が多くなり赤いクマチの花が咲き乱れていた。三十分位自動車で行くと、右側に紀元前四—三世紀頃の阿育王時代の宮殿跡があり、発掘された円い石柱の脚部が原状のまま、保存されていた。それは公園のようになっていて赤い花や黄色い花が美しく咲いていた。（その後の仏蹟はどこもよく保管されていた）午後七時ラジギールのレスト・ハウス着。ここは政府の保護施設で、電気は暗く木製アンペラ張りのベッドで、バスもなく夜中に蚊がでたのには驚いた。食堂

靈鷲山石窟、  
阿難舍利弗などの弟子のいたところ



でハダシのボーイ達がサービスをしてくれた。はじめてカレーライスとカレー煮の肉団子のインド料理を食べる。はじめは余りからくなかったが、次第に口の中がヒリヒリとして来て、沢山は食べられなかった。それに米がパラパラで日本米にはとても及びもつかない。生野菜にボンカン（サンドラ）と小さいバナナ（ゲラ）がつく。紅茶だけがうまい。食後若い者三人で、満月の中を旅行社の秋山氏の案内で近くの温泉見学に行く。温泉はインドには珍らしいらしく、そこは今日ではヒンドゥー教の寺になっている温泉寺であるが、釈尊時代にすでに温泉精舎の名があり、各宗教の修行者や巡礼者が沐浴したという。湯槽が階段状になっていて、昔は身分階級によって入るところが上からきまっていたというので、一番上のところだけが、ふき抜けの石の建物の中にある。ふき抜けの天井から見下す



王舗城の石室あと

と、暗い湯の中に何人かのひとがサリーを着たまま入っていた。

翌朝、自動車で温泉寺の前を通過して約十分で霊鷲山の麓へ着く。いよいよここから徒歩である。この道は二五〇〇年の昔、マガダ国のビンバサラ王が釈尊に会いに行く時につくった「ビンバサラ王の道」であるという。釈尊の登った道、舍利弗や目連が歩いた道、従兄弟の提婆が釈尊をなきものにしたようにして岩をころがした道、そして後には悪友提婆にそののかされて父ビンバサラ王を弑した阿闍世太子が後に前非を悔いて釈尊のもとに聞法にかよった「阿闍世の道」——その道を私達は今登っている。有難い来てよかったという静かな感激が心におこる。途中で後を振り返えると、灌木におおわれた王舎城の盆地が見える。そしてそれをとりまく多宝山、ウダヤ山等の王舎城五山が一望のうちに見える。約四十分位登ると、頂上近くのそこに自然の石窟があった。阿難や舍利弗、大迦葉などの弟子がいた跡だという。やがて鷲の羽根をひろげたような岩の間を抜けると頂上に出た。頂上は古いレンガにかこまれた平地で、ここが釈尊の説法の座であったところ。二人のチベット僧が読経し、数珠を持った年配の婦人が二人その周囲を行道していた。一行十六名感激のうちに読経する。この霊鷲山は、耆闍崛山（Gṛhṛakūṭa）といわ



ナーランダ大学僧院の遺蹟、左方が僧院あと、右方が大学あと

れ、無量寿經や法華經や觀無量寿經等多くの經典にでてくる説法の場所である。支那僧玄奘は西域記に「如来世に御して五十年に垂んとす。

多くこの山に居して広く妙法をとけり」と記録している。

下山の途中でブータン人の巡礼者七、八人に会う。麓のすぐ近くに觀經に出てくる父王殺しの阿闍世太子を諫止した名医であり臣であった耆婆(Nivaka)の病院跡による。

その近くに昔の面影をしのぶよすがもない王舎城趾があった。わずかに四圍の石垣のあとが人間興亡を物語るのみである。その中央にあたるところに深さ七〇呎位の灌木の茂った窪みがあり、觀經の序分に出てくる王舎城内七重の石

室跡であるという。一同ビンバサラ王や韋提希夫人をしのび記念撮影をする。そこから王舎城の北門(北のはずれ)をぬけると、竹林精舎の遺跡がある。竹林精舎は王舎城主ビンバサラ王が釈尊の徳をしいたてた最初の修行道場つまり寺で、人の背たけ位の竹叢がわずかに残っていた。

#### △ナーランダ大学僧院跡▽

竹林精舎から再び自動車にのって約三〇分、ラジギールの北一三キロのナーランダに着く。ここはナーランダ僧院(Nāṛaṇḍa Saṅgharāṇa 3-13 呎)のあったところで、古代インドにおける仏教教学の最もはなやかな中心地として栄えた。中央にはレンガの積みかさねられた大ストゥーパ(仏塔)があり、その他大講堂、個室、研究室、僧房、穀物倉、浴室等が完備し、下水道や井戸の設備も相当発達していたことがわかる。支那の法顯(五世紀)や玄奘(七世紀)や義浄(七世紀)が千辛万苦の末渡印して仏教を学んだのもここであり、玄奘が来た頃には一万人の僧がいたという。個室には一人用と二人用とがあり、部屋の隅には壁の中に窪みがあって書物を置いたところだという。仏塔のうしろには、広い廻廊があつてそれにそつた個室は、ほぼ原形をとどめていた。その個室の間仕切りのレンガの壁は、厚さ一・五米で中空となつてゐるのは、冷房効果を考えてあるそうである。その廻



ナーンダ大学の廻廊の壁にのこされた世界地図

廊の突当りの壁に、かすかにレンガを浮き彫りにしてあるのは、当時の世界地図である。玄奘も義浄もそれによって遙かに故郷をしのんだことであろう。この僧院も十二世紀に回教徒の侵入により、破壊されたが、当時の面積は数十万坪に及ぶものであったといわれる。附近には博物館やビハール州政府のたてたバリー語及び仏教研究所があった。午後一時頃、再びラジギールのレスト・ハウスへ帰り昼食をとりブッダガヤへと出発する。途中ボンボン河を通ると河岸で盛んに洗濯

をしていた。岩山

て来たボールペン、鉛筆をあげる  
と、大変喜ばれ校長先生まで出て来て受取っていた。  
そこを出発して、  
ほこりのひどい街道を約一時間走ると、尼連禪河の畔に出た。ブッダガヤもいよいよ近くなり、河の彼岸には釈尊が六年間苦行したという前正覚山が見えてきた。ブッダガヤの大塔前に到着したのは、午後五時であった。大塔参拝舎利札文を読む。ブッダガヤのレストハウスに入り、インド料理の夕食をたべる。夕食後若林、日比野、中山の三氏は、日本から持参したローソクの献燈に出かける。レスト・ハウスから暗い道に出てみると、金剛宝座の前のあたりに万燈供養の灯がゆらいでいた。



ラジギールの温泉寺、釈尊の時代からあつたという

(続く)

# 占いと念仏

—その1—



川上法俊

少し大きな寺院ではよくお札所の隣あたりにおみくじがあります。また境内の一二ヶ所に塵竹と天眼鏡を並べ人が机を出しているものです。神社も同じです。神社は別ですが、仏教寺院ではこれは少し変な話の様です。何故なら大小の戒律を通じて、占いや人相判断で生活する事は邪命戒とか惡伎戒とかいつて禁止されているからです。

大体占いか予言とか夢判断とか人相学とかは世界中寸時した文明国以上には必ずあるものです。それが後に少しく説明する周易とか、西洋流占星術、或は人相骨相とか、深遠な哲理より浅い科学的なものから、全く単純な直感的或はシャーマニズム的な水晶占や神筮的なもの迄全く種々あり、文化

の低いアフリカやオーストラリアの奥地にも必ず西長兼巫人の場合があります。これが未開人の間、或は過去の事のみと考えたら大間違いです。現に第二次大戦終了の後も世界各所で世界終滅の年の予言が信ぜられ再々大さわぎが生じています。この種の研究者黒沼健氏の報告によりますと、一五四五年カルフォルニア、一九五四年ローマ及米ミシガン、一九六二年印度ガンジス一体、米カルフォルニア、英ランカシアで、一九六三年香港でいずれも世界終滅の予言と騒動が起きています。(私の記憶ではこの他スイスと西班牙で各一回あったと思います)これは基督教では昔より千年毎に―イエスの死より―終末再審の事が信ぜられ、印度やアラビアでは占

星術が信ぜられて来た為に、少し有名且つ多少狂信的な牧師神父占星術者等が変な予言をするとそれが相当に信ぜられて大騒ぎとなるのです。而もそれが必ず二種の人々に別れての騒ぎとなるのです。一種は沐浴斎戒して召命を待とうとする人々、一種はもうどうせ終りで自分等は天国に行けつけない故にと、くそやけに悪事殊に乱交等を行う人々らしいです。基督教の救済觀念の不足、地獄感念の未熟さのまざまざの現われです。

だが此の様に西洋の予言や占も当らぬものばかりではありません。十六世紀のノストルラダム現存のジンディクソンなどは不思議な程種々の予言が的中しています。ノストルラダムは彼の近い年代の事のみならず第二世界大戦を迄予言しましたが、残念ながら此の予言だけは結説が逆でアジアが負けました。ディクソンのハマーショルド国連總長の飛行機死、ケネディの暗殺予言をした事は有名です。だが此の人々は大方、単なる直観ヒステリイ性の女性に多く、シーザーの妻が悪夢によりその日の凶事を知った如く或は水晶占或は祈禱冥想等によるものが多く周易の如く深遠な哲学によるものではありません。

仏菩薩の予言はそれを県記といえます。釈尊の滅後五十六億三千万歳の後に弥勒仏出現等の事は県記の代表ともいえます。

す。但し県記という大方は何時何処そこに何という人が生れ成仏或は一宗一派を開くという様な事が主であり、所謂、單純な予言といった様な事ではありません。では仏菩薩にはその様な事がないのかというところでもありません。或は尼犍子（闍那教徒）にその運命を予言したり、或は神通第一の目健蓮と某長者婦の胎中の児の男女を占ったりする様な話が出て参ります。（大般涅槃經）さてさうすると前述の邪命戒とか惡伎學習戒とかは一体どうなるのでしょうか。自分でやっている菩薩仏が他にこれを禁止するのは変です。此の事を知らねばなりません。仏教の戒律、殊に大乘戒律では必ず開遮通局塞とかいつて一定条件の下では通常原則で禁止してある事をも許可される事があるのです。通とか開とかは許可（パス）の意味です。殺戒や盜戒淫戒の如きは誰でも知っている犯してならぬ戒ですが、やはり特定の場合には許可されます。一殺多生などというのもこの為です。印度人のアヒンサーや小乗仏教との差です。然しアヒンサーの筈の印度人が印回兩教徒で随分殺し合いましたね。無理があるからです。然しその特定な条件というのが確実に守られぬ時はとんだ事になり、悪用濫用され、小乗にも劣る結果となるは当然です。その為にその原則及びその原則のできた理由をしつかり飲み込んだ菩薩でなければ許されません。（殺戒の遮開は大

般涅槃經に、淫戒の開邊は首楞嚴經に一番精しく書かれています。その戒律が根本戒（一般でいえば五戒の中の殺淫盜妄の四戒、梵網戒という様な本職が主の戒では十重戒）程開庶の条件がむずかしく、附随的な戒律四十八輕とか二百五十の親砕戒程その通局が易くなるのは当然で、その通塞の根本条件はその戒律にこだわらぬ方がその場合衆生の為になるというのはっきり見通がある場合に許可されるのです。

ですからそれが逆に衆生の利益になる事がみすみすわかりながら形式的戒律にこだわる様な時は大乘仏教徒としては罪になる時があります。孔子様は非常に偉い方信義を尊ばれた方で、人而無信不知其可也、大車無輶小車無輶、其以行之哉。といっています。孔子の説明者孟子は大人者言不必信行不果、惟義所適、在といつて孔子の根本吾道一以貫之……忠恕而已矣。を説明しています。孟子は亦女人在水に溺れている時男女七才式礼義で手をふれぬとして助けぬのは豺狼だともしています。

共通の思想でしょう。その為に觀察善惡業報經という様な地藏様のお経では積極的にお占の方法が述べられ、その悪い札が（木輪）出た時は過去の惡業報の故に懺悔して惡報を消す様にと教えています。（地藏様のお経は地藏本願經方広十輪經とこの経で地藏三部經といい地獄のことなどは前の二經

です）

淨土宗の特徴は非力凡夫の往生教であり、かつ専修念仏が本義であります。この場合に淨土宗徒がお占などをしてよいものか悪いものか少し考えて見ようではありませんか。前の邪命戒惡友戒の根本条件には頭に惡意をもって、又は利養の為にと書いてあります。（今説明しておりますのは大乘戒で小乗戒は日本ではあまり必要ないでしょう。）天台の伝教大師は占いに關して俗人ならば生活の為にするのも許されるだろうとし、華嚴の賢首大師は善惡は無論可で、一般も時と場合であらうとしています。

同じお念仏の徒と申しても正統淨土宗と親鸞系淨土宗のお念仏の心得が全く違わねばならぬ事は皆儀も御存知の事と存じます。三身（法報應三仏）三心（深心熾盛心廻向發願心）が非常に違うので、そのビュアーの信仰者程当然に一切の生活にその差が出て来ねば本當の信仰者ではありません。で当然お占いの様なものにこの態度は出て来る筈です。

しかも今説明申上げようとする周易（筮竹算木で立てる易）は水晶占等と異り大變哲學的で儒教の極致といわれます。為にその関係も多少ただのお占いより面白いものになります。

（続く）

## 華頂文庫シリーズ (16)

## 年中行事法話集

知恩院布教師会

仏教の年中行事は極めて多い。いやそればかりではない。寺の行事は、一年中、行われていなければならない。檀家の人々からすれば、一年中、このような寺の行事と共に、生活で規律づけられ、喜びの中の生活の一環とならなければならない。お葬式や、法事も大切であるが、それだけが、寺のすべてではないことを、知らねばならない。

この本は三百二十頁の小冊子ではあるが、新しい寺のあり方を示すような年中行事が、各月にわたって六十項目についてかかげられ、そのいわれや意義が、一流の布教師や学人によって、詳しく平易に説明されている。更にそれにまつわる話も数多い。有難い法話を聞きながら、その意義を知る手引きとな

る。

一月に例を取ってみると、「修正会について」「成人式のはなし」「初別時法話」と言った具合で、社会行事が、寺の年中行事の中に折り込まれている。二月の「建国の日」三月の「卒業式」と言った具合である。こうした行事が、日常のこのように行われ、檀家や信徒の人々が、何のこだわりも無く参加できるようにならなければならない。この頃、知恩院や増上寺でやっている成人式が、市や町でやっているものより、一段と若い人々に引きしまったものと、感激を与えていることは、大変よいことである。仏教とはこんなものもあったのだと、知恩院の音楽法要の成人式を見て感心している青年も数多かった。今月はお盆の月でもあるので、この中のお盆の話の一節を引用させてもらってみよう。

## ◎

目連というお弟子は、神通力の最もすぐれたお方でありましたが、ある日、自分の神通力をもってわが亡き母が、いかなる処におられるかとご覧になりました。

すると、誠に恐ろしいことはありません

か。母は餓鬼道に堕ちて苦しんでおられるのであります。目連の驚き悲しみはいかばかりでありましょう。

この母の苦しみを一刻も早く救いたいと思われましてお釈迦様におすがり申し上げました。

お釈迦様は、「毎年七月十五日安居あんくが終つたとき、種々の施し物を供えて、三宝に供養すれば、現世の父母の寿命を保ち、過去七世の父母の餓鬼道の苦をまぬがれる」とお教え下さいました。目連はこのお示しに従い、供養の法会をつとめて、母を蓮の花咲く極楽に生れかわらせたのであります。

盂蘭盆うらんぼんとは、梵語の「ウランパー」で「倒懸苦」と訳します。さかさまになるされるような苦しみを救うことが、お盆の根本精神であります。それは過去世に限らず、現世において倒懸の苦しみを受けている人々を救済することでもあります。

## ◎

こんな調子で更にいろいろと例をあげながら、人生の指針を説いている。僧にも俗にも是非おすすしたい本の一つである。

## 維新のころの人たち

— その一 —

### 大橋 俊雄

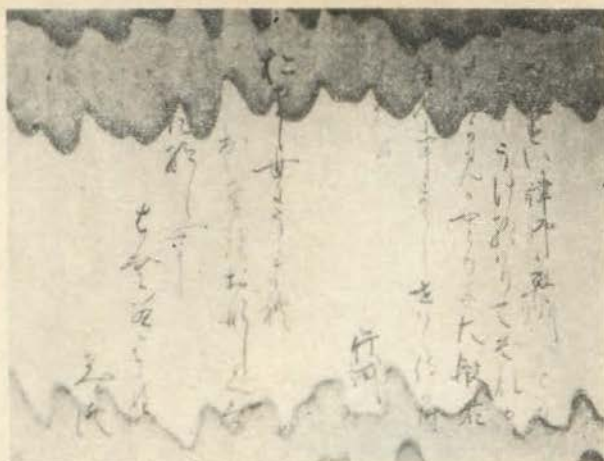
明治百年を迎え、とかく懷古趣味的に、往時を追想している。たしかに明治は近代化へのあゆみを位置づけたものであったにしても、維新時の仏教界は廃仏毀釈を身にしみて感じ、人をしておそるべき『法難』の到来を思わせた時であったといっても、過言ではあるまい。福田行誠は「三武の軌にちかし」といって、中国の三武の廢仏に比すべき法難であった述懐しているが、仏像の面を大弓をもって射ぬき快哉を叫んだ人もいれば、仏像經卷をうず高く積み重ね、これを土足にかけ、火に焼いた人もいた。仏飯をはんだ人がこれである、まして在家の人においておや。こんな世情であった。「要らぬもの 弓矢大小茶器の類 坊主山伏さてはお役者。」

行誠上人像（京都知恩院蔵）



これは当時のすがたを風刺した狂歌であったという。それならば、何故こうまでして仏教を排斥しなければならなかったのであろうか。

思うに明治維新は、封建的な権力を統一して、天皇中心の一大統一国家をつくることであり、日本を絶対主義国家として仕上げることであった。その実現をはかるために、政府は新しい施策をつぎつぎにうち出していったが、中でも明治



行誠上人が細谷家におくった和歌（山形県谷地細谷行央氏蔵）

元年神仏の混淆を禁じ、神道一本にしぼり、神祇事務局を設け、翌二年教導職取調局をおき、太政官の上に神祇官を位置せしめ、国家主義、排仏毀釈の政策をとらしむるに至ったことは、政府自からの手で仏教界に反旗をひるがえそうとする

意図をしめ

したものに  
ほかならな  
い。「神武  
創業の古に  
かえり、諸  
事御一新・  
祭政一致」  
の理想を実  
現すること  
が、新政府  
のとうとう  
した政策の  
真意であっ  
たが、その  
底に流れて

いたのは、天御中主神などの神々をまつる祭りごとと、人民をおさめる政治とは一体であり、そのためには徳川封建社会の思想的基礎であった仏教界の勢力を除去しなければ、理想は実現できないという考えが基盤となっていたらしい。

こうした廃仏毀釈運動は、明治になってはじめてひきおこされたものではなく、江戸期から既にその芽生えがあった。それは一に国学や神道が発達した結果、日本に生れ育つてきた惟神の道こそ、古来の伝統をうけついで純粹の教えであって、外国から入ってきた仏教は邪教であるという偏見と、二にオランダを通じて洋学が輸入された結果、コペルニクスの地動説が伝えられたことに原因していた。もし地動説によるとすれば地球はまるく、しかも太陽が周囲を運行しているの、地球の周囲には地獄もなければ極楽も存在しない。従って仏教經典に書かれているところは邪説であり、科学的根拠をもとにしたものではない。いわば釈尊の虚言であるから、かかる邪教を排斥しなければならないということに原因があった。

このような排仏運動をうけてたち、護法のために活動したのが福田行誠・鶴飼徹定・角谷隆音という人たちであった。行誠は武蔵の豊島で生れたが、父母の名は知ることができな

い。幼にして小石川伝通院の伴頭寛淳に師事して受戒し、長ずるはおよんで嵯峨の隠士土道や、伝通院の学頭露洲・東叡山浄名律院の慧澄について、宗学をはじめ俱舎・唯識・天台などの学を究めたという。学問一途に生き、また生きたいと念じ、仏教の興隆を願っていた行誠は、会う人ごとに大蔵經の通読をすすめ、「一度として大蔵經に目をとおさないような人は、坊主仲間にいれるわけにはいかない」と語っていた。

大蔵經を知らなくて、何で坊主といえるかというのが、上人の信念であった。しかし、おいそれと大蔵經を手に入れることはむずかしい。より多くの人たちに大蔵經を、そんな思いつきから、一人でも多くの人が手に入れることができるようにとの願いをこめて、予約出版制をとった我が国はじめての方法で、明治十三年四月から十八年七月にかけ、縮冊大蔵經四十快、四百十八冊を上梓した。

かつて行誠が増上寺におられたころ、石村桐陰という儒者が訪ずれてきた。陽春四日、庭先きの桜も咲きはこり、行誠はひとり静かに机に向い、仏書を読んでいた。「きょうは、まことによいお天気で……」と挨拶すると、行誠は、「さよう、きょうは誠によいお天気で、気分もおのずからせいせい

として、気分もさわやかです。こんな日に、仏前で読経したならばさぞかし有難いことでありましょうに、私をはじめとして一向そのようなとなみもしないということは、はずかしいことです。そんなこともあって仏法のおとろえたのは、もったいないことです」としみじみ語ったという。これというのも一掃除二勤行三学問を身をもって行じた仏者としての、腹のそこからでた言葉だといえましょう。

上人はつとに仏教をさかんにするためには、戒律を復興しなくてはならないと考え、持戒堅固の弟子を求めていた。尊敬さるべき僧侶がおればこそ、自然に仏教は興隆するのだ、人づくりこそ当面の課題としなければならぬというのが、上人の信念であった。その結果、桑折無能寺から琳堂の推輓によって迎えたのが、祥堂琳瑞であった。琳瑞は維新の大業の成る前に、小石川三百軒坂で凶刃にたおれた勤王僧であったが、「琳瑞沙弥事、益無事に出精耳心いたし申候、御案下さるまじく候、追々大事成就仕るべき仁物と見請申候、末たのもしく候。ゆめゆめ奥州の仏法興隆申すべきことに存候」とのべているように、琳瑞こそ行誠のもっとも期待をよせていた僧であった。

(続く)

## 人情

### 父と夫のこと――



母の十三回忌の法要の後、孫の手を引く父とお墓へ向う道すがら、遠い昔の思い出話に一時を過しました。

「あなたが世間をあつといわせるような特ダネで新聞の一面を飾るのと、娘の花嫁姿を一目見たいんですよ」

生前、病みがちな母が口ぐせのようにいつていたことをくり返しいった父はこの春、定年退職した地方記者です。

「お母さんも、娘には私のような苦労はさせたくありませんよ、といっていたが、お前もとうとう記者のお嫁さんになったなあ」

と、父は笑いながら、大役をはたしたかのように話しかけてまいりました。この時、私は数年前の激しくゆれ動いた家庭のページ

に思いをはせました。



私の住む甲府は周囲を山々に囲まれた盆地で夏は大変むし暑く、晴れの日が数日続きますと、それはいいようなない程の暑さです。友人宅からの帰り私は川べりの道を自転車を通っておりましたが、石に乗りあげ、ハンドルをとられ倒れてしまい、チエーンがはずれてしまいました。途方にくれてしまっているとき、丁度、その時、反対方向からオートバイで通りかかった青年が何の苦もなく直してくれました。それが今の夫です。

夫も東京の大学を出て後、この地に赴任してまいりました新米の記者だったのです。父とはその勤務する新聞社が違っておりまし

### 服部よし江

から、事件のあることに競争相手としてはりあっていたのですが、この二人が決定的に反目する事件が生じたのです。ある金満家の一人娘が自殺し、各社からその取材に行ったのです。夫は他人の目を盗んで、霊前の写真をそつと持ちさうとしたのですが、それを見つけた人一倍涙もろい父は激しくたしなめたのです。

「いくら特ダネをといっても、あまりにもひどいではないか。あとに残された家族のことでも考えたらどうだ。一人娘の突然の死ではないか」

「何いつているんだ。そんな私情はさんで良い記事が書けるか。この写真を自分で取りたいんですよ。そんなことをいつている

から、万年、平の地方記者しか勤まらなんだ。くやしかったら、世間を驚かすような特ダネを取ってみなさいよ」

この二人のやり取りに、外の人々も大変驚いたとのことでした。しかし、そのあとの父のことばで夫は何の返答もでなかったのです

「お前のような若僧に地方記者としての使命が簡単に分つてたまるか。特ダネを取るこのみが記者ではない。紙面のすみで数行を飾る地方での出来事をたのしみに待っている読者が多勢いることを忘れてはならないのだ。これが地方記者としての生がいなんぞ」と。



この二人がまたもはりあう形となった事件が、数日後起きたのです。

父からいわれたことばが頭にこびりつき、仕事に手につかぬ日が続いた夫はある酒場で人夫から耳にした事件で、これこそ特ダネだ、中央へもどる絶好の機会だとばかり、身仕度し、オートバイにまたがりとび出して行ったのです。

その時、父はいつものように帰宅後、酒をちびり、ちびりとやりながら、他社の新聞に目を通しておりました。その時、隣りの主人がこれまたいつものように将棋をさしにやってきました。

「ちょっと耳にしたんですが、何んでも数日前に飛行機が新道工事の先の谷間に落ちていくのを見た人がいるそうですよ」

父はこの話しを聞き、将棋どころではなくなり、地図を取り出し、何か一人ごとをいしながら、明早朝出かける仕度をはじめました。夫が人夫から耳にした事件というのも、この飛行機の一件だったのです。父も夫も特ダネとばかりにそれぞれ聞いた谷間を目指したのです。

父は出かける前に、

「あの若僧記者をどう思っているんだ。お前こそは記者の妻にしたくはなかったんだが、もうその気があるのなら仕方ないなあ」と、かねてより交際していた私達のことをうすうす知っていた父はそのようにいい残して、新聞社さし廻しのジープで出かけて行ったのです。



父より一足先に事故現場附近に着いた夫はロープを橋桁にしっかりと結び、流れの早い谷川の石べりにおり、奥へ奥へと登って行ったのです。あたりは人里遠く、うっそうと草木の茂る人の侵入をさまたげんばかりの所で

す。  
一方、やや遅れて到着した父は橋のたもとに置いてあった夫の勤める新聞社の旗がついているオートバイを見つけると、やられたかという気持で、夫がかけたロープをたよりに川底におり、急ぎ足で夫同様に山深く入って行ったのです。二人が出合ったのは夫が急に川幅が狭くなり、先へ進めず、こまりはててどうしようか思案しているところだったので

す。  
いくら仲の悪い二人とて、人里離れた山間部のこと故、心ほそい気持も手伝って、互いに牽制しながらも、結局、峰まで登ることに決め、夫が先に登り始めたのです。丁度、半分程登りきった時、夫は足をすべらし、谷間までころがり落ちてしまったのです。急ぎ近よった父は夫の足が折れていることに気がつ

き、氣を失った夫をかつぎ起し、草の茂っている平らな所まで連れて行き、水にひたしたタオルで血だらけになった顔をぬぐい、リットから応急用の薬品を取り出し、手当し、自分のガードルをほどき、木片を当て、骨折した夫の足に巻きつけたのです。

しばらくして気がついた夫は何が起ったのか分らず、ただぼんやりするばかりだったのです。しかし、心配そうにのぞきこむ父の顔を見るにつけ、やっと自分の立場が分ったのです。それからの数時間、二人は何を話し合ったのか、多くは私に教えてはくれません。しかし、二人だけのその数時間の間、父も夫も不思議と気持ちの通じ合う時を過したそうです。



それより先、父は飛行機の墜落現場を発見するやいなや、その報を知らせるであらうためにリットにのばせた愛蔵の伝書鳩に夫のケガの様子を記し、救援を求める便りをたくしたのです。

いつも父からの伝言を運ぶとはげしく鳴く鳩に気づいた私は、

「とうとう、お父さんはやったんだわ」

と、一人、ことをいいながら巣箱から鳩を出し、急ぎ父の便りに目を通したのでした。しかし、便りは事故現場の発見ではなく、愛しい夫のケガの様子でした。

救急車をたのみ、新聞社の人達と現場に向う間、数行の要件のみの父の便りでは夫のケガの度合が分らず、ただ無事を祈るのみでした。今にしてみると、よくも女だてらにあのロープをおりて行つたかと思うと不思議ぐらいな、それ程危険な場所を行つたのです。一目でも早く夫の様子を見んものと。

父の手厚い看護のもと、静かに草辺に横たわる夫を見た時、思いの外元氣な様子でありましたので、まずは一安心。タンカに移された夫は父が、

「すでに墜落したと思われる飛行機を見つけるより、今生きている一人の人を助ける方がよほど大切なんだ」

と、激励してくれた様を幾度も、幾度も話すのでした。

そつと私をよんだ父は、

「あの若者は思つたよりしつかりした考え

を持った好青年だ。新聞記者というのが玉にきずだが、お前を安心してまかすことができるだよ」

と、一記者から父の立場にもどったかのようになり、ほつりと話しかけてまいりました。

夫のケガは思いの外軽く、一ヶ月もたたぬうちに全快し、再び仕事をできる程になりました。この事故をさかいとして、夫は以前のような、あの激しい特ダネのみを追う記者から、人情味あふれる記者に変わりました。

父と夫の二人を結びつけた飛行機の墜落現場は夫のケガの日から数日後、ほかの場所で見えませんでした。人のうわさをたよりに危険な場所に向つた父と夫は関係のない所をさまよっていたことになりましたが、私にとってはこのおかげで二人のわだかまりを取り除くことができる幸運をつかむことができたのです。それより半年後、私達はささやかながらも結婚式をあげることができました。今は亡き母には夫が新聞記者であることが気に入らなかつたかも知れませんが、これも我が家に縁ある職業であると思ひ、母が父についていたように私も夫についていく覚悟です。



和 森 翠 明

## 一大事因縁を感じる

ない。いわゆる醉生夢死の生活ということになる。

釈尊は、「自分が、ここに生まれてきたのには、一大事因縁がある。この一大事因縁を成しとげねば、死ぬにも死ぬないのである。それ故に一瞬時たりとも、おろそかに過せない。」というものが、みの入った、命のこもった一生というものである。

お盆にしても、お寺や、各個人の家庭においておこれわれる法事や、いろいろの行事にしても、なにごとでも「あれをしてよかった、意味があった」という仕方があって欲しいと思う。

釈尊のいわれる一大事因縁が見出されるようなあり方があって欲しいと思う。

日本には、古くからいろいろの行事、たとえば、お盆とか、お彼岸とか、或いは、お寺や各個人の家の法事とか、ひな祭り、端午の節句など、長い間、民族のなかに伝えられているが、そういうものを、ただ、慣習的におこなっている場合が多い。わたしたちの日常の生活の万般の事々は、すべてそういう事でよいのかもしれない。けれども、それでは、みが入らない。なにごとによらず、自分のやっていることの意味が、はっきりわかり、自覚されたときには、みが入るものである。言いかえるならば、命がこもることになる。

日常生活万般の事々について、命がこもってくると、生活が張りきってくる。意味が十分に分らず、みが入らず、命がこもってこないと、生きているのか、死んでいるのかわから

物事に、一大事因縁を感じるところに、その物事の中に本来の意味が見出されてくる。

無量寿経のなかに、つぎのようなことが述べられている。

いつも釈尊におつかえしている弟子の阿難が、ある日ふと、釈尊のお顔を見ると、釈尊のお顔が、いつになく光に輝いておられる。どうも、いつものお顔とは異なる。そこで阿難は、釈尊におうかがいした。

「世尊よ、なぜ今日は、世尊のお顔が、いつもと異って光り輝いているのでありましようか。世尊よ、今日は世尊には、なにかただならぬことをなされようとせられるようにお見受けいたしますが、いかなることでありましようか」

すると、釈尊は、それに対して、すぐに答えられずに、阿難に問い返えされたのである。

「阿難よ、御身が、そういうことを問うのは、何か御身に思いあたるところがあつて、問われるのか。或はまた、天人たちが、御身に、そういうことを問えとおしえたので問うのであろうか。」

そこで、阿難は答えた。

「天人たちがいて、その天人たちにおしえられて、お尋ねするのでなくて、わたくしにそう思いあたるところがあつてお尋ねするのであります。」

釈尊はしずかに、しかし自信あふれるまなざしで申された。

「阿難よ、御身が、如来の上に、一大事因縁が兆しているのではないかと思ひあたる心、そういう心が動いているということは、それは御身がまさに、御身自身の一大事因縁を感じる心によるものである。」

自分が今、そこにおかれていることについて、一大事因縁を感じるものは、またあらゆる生きとし生けるものの一大事因縁を感じるもので、そういう人は一切衆生の代表者である。そういう一大事因縁が、もりあがってきている今こそは、また、如来みずからの一大事因縁が成しとげるときである。」

そのように説かれた釈尊は、みずから此の世に出られた、御自分の一大事因縁としての無量寿経の説法をはじめられたのである。

### 三

この無量寿経の説法は、阿難が、釈尊の上に、一大事因縁の成しとげられようとしていることを感じ、そういうことに思ひあつたことが動機となつてできあがつていった。

それはまた、釈尊が、阿難にいわれたように、常に、釈尊に侍していたということ、すなわち、自分がそうしているこ

とについての、阿難自らの一大事因縁に思いあたっていたことに基くのであった。

釈尊のおしえは、常に、わたくしみずからが、いまここに、こういうようにおかれていることについての一大事因縁、すなわち、わたくしが、ここにおかれていることについて、そこに只ならぬ、わけがあるのであるということを、思いあたらしめようとするものである。そういう、釈尊のおしえの意図、本意がよくあらわれた一つの例として、つぎのよ

うな經典の説話に注意したいのである。  
釈尊在世のとき、釈尊の弟子のなかに、その人の信仰が確かであったと言おうか、その人が確かな悟りの境地へ到達していたと言おうか、事あるごとに、釈尊が、

「あの人の心は確かである。よくもあのような確かな心の世界にまで到達してくれた」

と讃嘆しておられた立派な弟子があった。師匠の釈尊が讃嘆されたくらいであるから、かれが、ほかの弟子たちからも尊敬されていたことはいうまでもない。

ところが、その尊ぶべきかれが、ふとある動機から病をえて、急に亡くなってしまった。

師匠の釈尊も、その尊ぶべき弟子の死を哀惜されし、ほかの弟子たちも、みな悲歎になげくのであった。しかし、下

座の弟子たちは、尊敬すべき上座の弟子が、平素、師匠の釈尊から、「あの人の信念にまことに確かである」とほめられていたのであるから、さぞかし、立派な往生を遂げられたであらうし、うるわしく成仏されたにちがいないと考えた。そうあったに相違ないとは考えていたが、しかし、本当にそうであったであらうか、ということも、また気にかかった。

宗教問題について、その上座の方が、釈尊から平素、折紙をつけられていた立派な方であっただけに、下座の弟子たちにとつては、「本当にそうであった。そうに違ない」ということが保証されて欲しかった。

そこで、弟子たちは、釈尊に、そのことを尋ねた。

「平素、世尊が、あの人の心に確かである。よくもあのような心の世界まで到達してくれたとおほめになられた。あの方の往生に立派であったでしょうし、うるわしく成仏されたであります。そして、成仏されたあの方に、どこにどうしておられるのでしょうか。あの方の、たましいの姿は、どんな姿でありましょうか。どうぞ、おしえていただきたい」と請うのであった。

親しい尊敬すべき人が亡くなって、その人を追憶するあとにのこった遺族にとつては、「その尊敬していた人が、うるわしく成仏したのであらうか、どこにどうしているであらう

か」と慕いめぐらすことに、人情の常である。

#### 四

ところが、弟子たちの、その尋ねの言葉にも拘らず、釈尊は、それに対して、何の返答を与えようともしない、黙つて、たずねた弟子たちの顔をグッとにらんでおられた。

やがて、釈尊は、静かながら、きびしい口調で語られた。

「弟子たちよ、例えば、ある人に毒の箭が当たったとしよう。毒の箭が当たったので、その人の近親の者が心配して、その毒の箭を抜いてくれる医師を求めて大騒ぎをしているときに、その毒の箭の当たっている当人が、毒箭をぬくことに専注せずして「自分は、毒箭を除くことよりも、一体どういう人間が自分に毒箭を射たのか。その人間は、丈が高いか低い、顔が黒いか、白いか、その職業は何であるか。また、その毒箭を射た弓が、何の木でできているか。」というように、詮索しているとすれば、その人間は賢いであろうか、愚であろうか。」

弟子たちに、いっせいに答えた。

「そういう人間は、もちろん愚者であります。毒箭を射た人間や、その親類がどうのこうのと詮索している間に、その人間は、毒のために死んでしまうからです」

そこで、釈尊は、また静かに述べられた。

「そうであろう。それと同じであつて、近親の者が亡くなつて、あの人の往生は、立派であつたであろうか、どんな姿で、どこにどうしているのであらうか等と詮索していることは、毒箭が命中しているのに、毒箭を射た人を詮索している愚に等しいことである」

この釈尊のおしえは、大變に意味のふかい、また急所をついた言葉であると思う。

この經典の物語に出ている、弟子たちが、釈尊のもとへいって、「あの上座の弟子が亡くなられて、もとより感化せられたことであらうし、それならば、それで、どこでどうして、どういう姿でおられるのであらうか」と尋ねたということは、平素、みなが尊敬している釈尊もほめてゐる、上座の弟子に関するものであるから、弟子たちにとってみれば、その人の魂のゆくへともいふべきものについて知ろうとすること、一応、真剣のこのようである。

けれども、釈尊からみると、その問いが、毒の箭を射た人の詮索やら、毒箭を放った弓の詮索をしていることのよう、に、要点が、スッポぬけているというものであつた。

いはば、弟子たちの心の眼が外に向いていて、自分の内の一大因縁のあしもとが、よく注意されていないといふことを、おしえられたのである。

# 和訳三部経

## 無量寿経(5)

### 法蔵菩薩の御修行



村瀬秀雄

#### 一、浄土以外の国土の菩薩

もし私が仏になったならば、他の国土にいる菩薩たちが私の名号を聞いて、仏になるまでは身体の六根が完備しているようにしたい。もしこれができなかったならば私は仏にならない。<sup>1</sup>

もし私が仏になったならば、他の国土にいる菩薩たちが私の名号を聞いて、命終った後には尊貴の家に生れるようにしたい。もしこれができなかったならば私は仏にならない。<sup>2</sup>

もし私が仏になったならば、他の国土にいる菩薩たちが私の名号を聞いて、命終った後においても清浄な行を修行して仏道を進むようにしたい。もしこれができなかったならば私は仏にならない。<sup>3</sup>

もし私が仏になったならば、他の国土にいる菩薩たちが私の名号を聞いて、心から悦んで菩薩行を修行してあらゆる徳を具備するようになるにしたい。もしこれができなかったならば私は仏にならない。<sup>4</sup>

もし私が仏になったならば、他の国土にいる菩薩たちが私の名号を聞いて、仏道を修行

し、その功徳を失わぬようにしたい。もしこれができなかったならば私は仏にならない。<sup>5</sup>

もし私が仏になったならば、他の国土にいる菩薩たちが私の名号を聞いて、無量の諸仏を見奉り、その教法を知って、成仏できるようにしたい。もしこれができなかったならば私は仏にならない。<sup>6</sup>

もし私が仏になったならば、他の国土にいる菩薩たちが私の名号を聞いて、自我に執着しない清浄な解脱の境地に入り、諸仏に供養を捧げ、他の教法を聞いても誹謗することのないようにしたい。もしこれができなかったならば私は仏にならない。<sup>7</sup>

もし私が仏になったならば、他の国土にいる菩薩たちが私の名号を聞いて、第一に一切は音のようにとらえるべき体がないと悟る音響忍、第二に自己も縁に随って存在すると悟る柔順忍、第三に真実の認識に達して一切は永遠に生滅しないと悟る無生法忍を得て、諸仏の法から退くことがないようにしたい。もしこれができなかったならば私は仏にならない。<sup>8</sup>

註

1 これを第四十一、諸根具足の願という  
六根は眼耳鼻舌身意のことで、感覚と意識の器官をいう。

2 これを第四十三、生尊貴家の願という  
尊貴の家は善良で恵まれた家庭のこと。

3 これを第三十六、常修梵行の願という

4 これを第四十四、具足徳本の願という

5 これを第四十七、得不退転の願という

6 これを第四十五、住定見仏の願という

7 これを第四十二、住定供仏の願という

8 これを第四十八、得三法忍の願という

## 二 四番偈を述べる

法蔵比丘は、このように四十八項にわたる本願を説き終つてから、更に讃歌によつて次の通り重ねて誓つた。

『私はこのように超世の本願をたてた。私は必ず仏となつて、これらの本願を実現するであろう。もしこれらの本願が成しとげられなかったならば、私は誓つて仏にならない。私は永劫にわたつて大施主となり、あまねく一切の貧苦を救うであらう。もしこれができなかったならば、私は誓つて仏にならない。私

は修行して仏になつたならば、私の名号を十方世界にゆきわたらせよう。もしも私の名号が聞かれぬ所が、どこかにあつたとしたら、私は誓つて仏にならない。

私は欲を離れ、深く正しい心を持ち、淨い智慧によつて、菩薩行を修行し、無上の道を求め、人々を導く師となるであらう。私はすぐれた力をもつ光明を放ち、あまねく一切の世界を照らすであらう。この光明は貪りと怒りと愚痴との闇を除くもので、広く多くの人々をして災厄から救い出すであらう。即ち人々は悟りへの智慧の眼を開き、迷妄の闇を除くことになる。人々が誤つておちてゆく悪所に通ずる道を閉塞し、至善にいたる門を開いて人々を通らせる。私が仏の位についたならば、このような威光を十方に輝やかすであらう。そのために日や月の光りは輝きを失ひ、天の光りも隠れて現れようとしなひ。

私は人々のために仏法の蔵を開き、広く功德の宝を施すであらう。大衆の中にあつて常に説法し、獅子吼するであらう。一切の仏を供養し、多くの功德を具え、本願と智慧とをすべて成就し、三界の雄となるであらう。仏

の智慧は何ものにも遅えざれないが、それと同じく私の光明は一切にわたつて照らさないものがない。

願わくは私の功德と智慧は、仏と同じものでありたい。こうした願いがもし成就したならば、その証拠として天地が感動し、虚空から妙なる蓮華を降らすであらう。

法蔵比丘がこのように讃歌を述べ終ると、まさにその時、大地は六種にゆれ動き、天から妙なる蓮華が降つてきて、法蔵比丘の上に散りかかった。そして自然の音楽が鳴りわたる、空中から次のように讃嘆する声が聞かれた。

『汝は無上の悟りを証得し、必ず仏となるであらう』

このようにして法蔵比丘は大願を備え、道を修め、誠の心をもつて世間を超越した深い悟りの境地を求めるのであつた。

## 註

1 大施主は財施と法施をする者のこと。

2 貧苦は智慧も能力も共に貧しく、そのために苦しむ者のこと。

3 三界は欲望が支配する世界と物質だけ

の世界と精神だけの世界との三つであるがすべての世界を意味する。

4 六種は動、起、涌、震、吼、撃の六通りのこと。

### 三 法蔵比丘の修行

法蔵菩薩は世自在王仏やそのそばにいた梵天、竜神、仏法の守護神その他多くの神々の前にあつて本願を建て終つた。それに続いて法蔵菩薩は一意専心に浄土を莊嚴してゆつた。浄土は限りなく廣大であり、他のどの国土に較べてもはるかに勝れ、独り妙なものであつた。そして他から影響されることがないので、永遠に衰えず変らぬ所となつた。このように浄土の莊嚴が勝れていることは、法蔵菩薩が長い時代をかけて積み重ねて行つた無量の徳と行とが蓄積された結果であつた。法蔵菩薩は修行するに當つて、他人を怒り憎んだり、他に害を与えたりすることがなかつた。そればかりでなくとも貪りや憎悪や加害を思うことすらなかつた。色声香味触法といった感覚的な欲望に執着するところになかつた。苦しみにあふ事も多かつたが、常

によく耐え忍ぶのであつた。少欲であるからいつも足ることを知つていた。貪り怒り愚痴といったものがないから、心はいつも靜かに澄んでいた。智慧は妨げるものがないから、全く自由であつた。更にまた虚偽の心がなく疑う心になかつた。他に対してはいつも和顔愛語<sup>2</sup>して、相手から求められるまでもなく、こちらから進んで法を説くのであつた。

修行をするに當つては勇猛であり、しかも精進を続けたので、その志に少しの倦み疲れがなかつた。もっぱら河浄の法を求め、それによつて人々に利益を恵み与えた。仏法僧の三宝を恭々しく敬い、師長を尊び、福德と智慧を以て修行し、多くの人々に功德を与えた。一切は空であり、無想<sup>3</sup>であり、無願であるとして悟つて、果として求めるものもなく、因として起るものもなく、すべて実体がないものと悟つた。悪口をいったり、自分を害したり、他人を害したり、自他ともに害したりすることがなく、常に善語を用い、自分を利し、他人を利し、自利ともに利するようにした。王位をすて國をすて、財産と妻子とに絶縁し、自らは六波羅蜜<sup>4</sup>を行じた。そして他人

にも教へ修行させた。かくて法蔵比丘は限りない歲月にわたつて功を積み、徳を重ねたのである。

#### 註

1 色声香味触法は五境といい、眼耳鼻舌身の対象となるもの。  
2 和顔愛語は和やかな顔と慈悲深い言語のこと。  
3 無相は姿も形もないこと。  
4 六波羅蜜な布施（財施法施により人々を導く）持戒（非をやめ善をすすめる）忍辱（苦痛と屈辱を忍んで憎まない）精進（雑念を去り専ら修行する）禪定（靜慮）智慧（仏法に通じ修行する）の六つで、菩薩が修行するもの。

### 四 法蔵比丘の成仏

法蔵比丘はどここの世界に生れ替つても、いつも自由に意のままに宝蔵をあらわし、無数の人々を教化し安心立命させ、悟りの境地に導いた。ある時には長者となり、居士となり、バラモンとなり、宰相となり、國王となつた。またある時には転輪聖王となり、天界

の主となり、梵天となったが、常に一切の諸仏に房舎、衣服、飲食、散華焼香の供養を捧げた。こうした功德は教えることのできない程に無数にあった。

法蔵比丘の口氣は香潔で青蓮華の如く、全身の毛孔から芳ばしい栴檀の香を発し、その香りはあまねく無量の世界に及んだ。その容色は端正であり、お姿は殊にすぐれ、中から常に尽くることのない無量の宝、衣服飲食、華香を出し、天蓋や幢の莊嚴具を無数に備えていた。このようなことはすべての天人の及ぶところでなく、一切のものに対して自由自在の能力を持っていた。

この時、阿難尊者は釈尊に問うた。

「法蔵菩薩はすでに成仏して涅槃に入られたのであろうか。それともいまだ成仏されずに修行中なのであろうか。更にまた今現にどこに居給うのであろうか」

釈尊はこれに答えられた。

「法蔵菩薩はいますでに仏となられ浄土を完成し、現に西方にまします。そこはここから十萬億仏土を隔てた所である。その仏の世界を名づけて安樂国という」

阿難尊者は、更に問うた。

「その仏は仏となられてから今に至るまで、いか程の時がたつているのであろうか」

釈尊は答えられた。

「仏となられてから今に至るまで、十劫という時を経ている。

その仏の国土は自然の七宝、即ち金、銀、瑠璃、珊瑚、琥珀、砗磲、碼碯を合せて大地をなしていて、その広さは際限なく拡げられている。これらの宝石は互に入れ混っているが、よく調和がとれている。宝石はまばゆく光り輝き、微妙な美しさをしている。この清浄な莊嚴は十方世界にその類がなく、あらゆる宝の中の精を集めたものであって、天上最高の宝のようである。

またその国土には須弥山や金剛鉄圍などのような山は一切なく、海もなく谷もない。ただし仏が神力を以て見ようとすれば、山も海も谷もたちまち現われる。

また地獄、餓鬼、畜生その他の苦難をうける所がなく、春夏秋冬の変化がないので、常に寒からず暑からず、一年を通じて温和な氣候がづく所である」

その時、阿難尊者はこと更に釈尊に質ねることがあった。

「釈尊も、もしその国土に須弥山がないと、山に住む四天王や忉利天の住む所がないが、どこに住むことになるのであろうか」

釈尊は阿難尊者に反問していった。

「それなら天に住む夜摩天や色究竟天はどこに住んでいるのであろうか」

阿難尊者は答えた。

「それらの神は行業の果報の不可思議によって空中に住んでいるのである」

そこで釈尊は説明された。

「行業の果報は不可思議なものであるが、諸仏の世界も同じく不可思議なものである。その仏の国土においても、功德の力によって、それ相應の所に住むのであって、山がなくても虚空の中に住むことができるし、殊に山がなくてもよいのである」

更めて阿難尊者は釈尊に申し上げた。

「私はこの法を疑ったわけでないが、ただ未來の人々のために、もし疑問があつてはいけないと思つたので、その疑いを除くために、ことさらに問い奉つたのである」

なりました。

七月、今は亡きご先祖さまの霊を弔う盂蘭盆会の月となりました。最近、都会ではあまり見られなくなりましたが、日中の暑さがいまだ残る路傍に、キュウリやナスで形づくった動物を乗り物として、鐘を打って迎え火を焚く風情は夏の風物詩として欠くことのできぬものです。

夜空にたなびく煙の中に、今は亡き肉親の思い出を追憶し、また今、生かされている喜びをかみしめる良き機会です。各地方によりその方法は異なることでしょうが、この流れの早い社会での心の休息処として、是非、永く続けたい行事ではないでしょうか。

梅雨とも別れを告げ、暑い日々が続く頃々です。毎年やって来るとは申せ、その避暑方は頭の痛いところです。以前は炎天下の棚経で身体をまいらせてしまったのですが、ここ二、三年は梅雨のあい間をぬって、裸になり境内の草取りをしたため、何の苦勞もなく棚経の後も元氣よく過すことができるように

今年もこの方法とばかり草と取り組んでおりますが、取っても、取っても芽をふく草の強さには閉口させられます。しかし、人々の安息所としての境内をきれいにしなくてはと自分なりの満足感を味うために、今後も続けていきたいと思っております。

最近の弊誌の読後感はいかがでしょう。開宗八百年を迎えるにあたって、更に実のある飛躍を目指しております。近頃、よく信仰不在論ということがいわれておりますが、人としてこの世に生れいずる限り、誰しもが潜在的には信仰心を持ち合せているものと思われまふ。

この芽をふき出させること、これも弊誌の使命と自負しております。これらをよりすみやかにこなすためには、それをなす立場にある私達の気構えが大切です。会員の方々に、誌法を大いに利用していただきと共に、弊誌の弱点をきめつけていただき、共にこの芽を大きく育てていきたいと思ひます。

「浄土」講読規定

一部 定価 金六十円

(送料 六円)

会費一カ年 金七二〇円

(送料 不要)

浄土 七月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十三年六月二十五日 印刷

昭和四十三年七月一日 発行

定価 六十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二男

印刷所 新光社印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一ノ十二ノ六

発行所 法然上人顕仰会

電話東京二六二五九四四番

郵便東京八二一八七番

新刊 故林彦明大僧正著

「五重大会勸誠講録」 送料共400円

頒売所 四日市市六呂見 観音寺中

記主 禅師 鑽 仰 会

振替 名古屋 4 0 1 2 番

新刊 藤 井 実 応 著

「現代を生かす法然上人の宗教」

送料共 500 円

内 容 法然上人のお話  
一枚起請文のお話  
現代を生かす法然上人の宗教

申込先 愛知県宝飯郡小坂井町伊奈新屋

藤 井 実 応

振替 名古屋 2 7 4 6 2 番

施 本 『お ぼ ん』

価 10 円 送料 15 円 B 6 変型

本文 8 ページ 送料実費

○お盆とお施餓鬼についてのやさしい解説の施本として  
おすすめいたします。

大 道 社

東京都千代田区飯田橋 1—11—6

発 行 所 T L E 東 京 0 3 (262) 5 9 4 4

振 替 東 京 8 2 4 7 番

宮林昭彦 著

# 「極楽に生きる」

宗祖のご生涯を通して、現代に生きる私達に  
指針を与える好書

定価二六〇円 送料五〇円

御希望の方は弊会まで申込み下さい

四版 村瀬秀雄 著

# 浄土宗 檀信のおつとめ

訓読・註解を付したわかりやすい経本

定価一〇〇円 送料五〇円

御希望の方は弊会まで申込み下さい

## ◇ 浄土トラクト ◇

|              |        |          |
|--------------|--------|----------|
| 四季の寺まいり (再版) | 安居香山 著 | 価30・〒15  |
| 浄土宗のおしえ (四版) | 宮林昭彦 著 | 価30・〒15  |
| 諸仏の戒め        | 村瀬秀雄 著 | 価5・〒15   |
| 一枚起請文をめぐる    | 村瀬秀雄 著 | 価120・〒35 |
| 選択集私解        | 竹中信常 著 | 価120・〒35 |
| ものいう石        | 竹中信常 著 | 価150・〒45 |

多数お申込みには割引いたします。施本にご利用下さい

発行所 法然上人鑽仰会 TEL (262) 5944  
振替 東京 82187